

コペンハーゲンの古本屋

稲賀 繁美

昨年、日文研の客員教授でいらした鶴田欣也先生が企画に参画されて、一九九八年九月にコペンハーゲンで「幻想の西洋巡礼から憧憬の日本への回帰」と題する会議が持たれた。巡礼研究の宗教学者イアン・リダーがキー・ノート・スピーチ、会議そのものは小泉八雲や森鷗外にはじまり、荷風や谷崎、横光を通過し、伊藤整、遠藤周作、大庭みな子さらには大江から村上春樹までを視野に収める、充実した会合だ。事前にペーパーを全員に配布し、会議の席では口頭の要約あるいは追補。続いてさっそく参加者全員による討論、という鶴田方式。そのお陰で、ともすれば退屈なペーパーの読みの儀式になりがちな学会とはまるで雰囲気が違う。とりわけ鶴田先生の即妙の冗談やら質問が参加者に伝染してゆく様子には感心。主催者のコペン

ハーゲン大学教授、長島要一先生の周到な手配で、会場には旧市街の真っ只中に位置するコペンハーゲン大学本部の、由緒ある歴史建造物が選ばれたのも幸いした。

当方はいえ、西欧・北米以外で開催される学会への渡航補助金という、学術振興会からのまことにびったりな助成に、作文をして応募しながら、あっけなく断られたりして、何ほどの貢献もできなかった。とはいえ、会議後、スーザン・ネイピアがアジア研究所で学生相手に行った、ナウシカ以降エヴァンゲリオンに至る八〇年代以降の日本のアポカリプス・アニメについての刺激的な講演（あるいは実に教育的な巧い授業）に、飛び入りでコメントイターをやらされ、大澤真幸や四方田犬彦、リヴィア・モネの受け売りを即興でひとくさり。思えば二年まえもルンドでノーマン・ブライソンの講演に口を出し、三島の首切り後上演のサロメに言及し、森村泰昌の『マネ』の真似の黒猫に置換された招き猫の民俗学的由来を開陳したこともある。予期せぬ展開だけに悪くない経験であった。

だが本日のところは、学会報告は棚上げにして、長田兄に倣い、古本屋の話にしよう。旅行者には便利なことに、十軒以上の古本屋が旧市街の路地に、密集というほどではないが点在している。市庁舎すぐ近くの宿の前の通りから一本ずれた Laederstræde には、十五番地に Peter Grosell's Antikvariat ⑧、隣の九番地には Bøger & Kuriosa ⑥ が並んでいる。駅から市内に向かう中央の通りは H. C. Andersens Boulevard を越えると歩行者天国になっているが、その Frederiksbergade を五分ほど道なりに行くと、左手に緑地に囲まれて Helligandskirken という教会が見える。そのあたりで、向かって右手にもう一本平行している通りに入れば、そこが Laederstræde。まず Borger & Kuriosa。安くて良い本ですよ、と長島さんに言われて訪れたのだが、さっそく長年探していた本に何冊も出会ってしまった。

真っ先に目に飛び込んだのは Nils Gosta Sandblad, *Manet, Three Studies in Artistic Conception*, Hakann Ohlsson, Lund, 1954。地味な学術書だが、マネ研究では歴史に残る名著。といえ日本では容易に参照できず、前著『絵画の黄昏』の執筆の際にも、三浦篤さんから一部のコピーを拝借しただけで、全部に目を通すことができず、早速阿部良雄氏の書評でその部分の不明を指摘されて煮え湯を飲む思いのした、曰く付きの本。思えば大学都市ルンドは海峡越しに小一時間の目と鼻の先。西欧の市場では決して出てこない本が、コペンハーゲンに転がっているのも道理。値段は一五〇クローネだから、ざっと三千元。これに気を良くして書棚と睨めっこを始めるや、来店して何分もたたぬのに、店番の女性がコーヒーは如何と言う。喫茶店も兼ねているのかしら、などと一瞬戸惑う。結局無料で(なぜか)お茶を一杯振る舞ってくれた。一見さんの店でいきなりお茶を出されたのは初めての体験だ。

棚を見てゆくと、掘り出し物が続出。最近のものでは、パリではもう絶対に入手不可能で、編者のジャン・ユベール・マルタンも困っている、ボンピドー・センターの *Magiciens de la terre* 1998 の展覧会カタログが、やはりたった百五〇クローネ。なぜか再版が出ず困っていた Alfred Barr Jr, *Matisse, his art and his public*, 1951 はか一九五五年の MoMA 紹介のフランス語版 *Matres de l'art moderne, le musée de l'art moderne, New York* (Moma はどうみても改装以前の空間のほうか、はるかに緊張感があったが、その記録としても歴史的価値がある)。マネ受容史で落とせない Emilie Waldmann, *Edouard Manet, Paul Cossier*, Berlin, 1923。最近仏訳は出たが、やはり原著が必要な Hans Prinzhorn, *Bildneri der Geisteskranken*, Julius Springer, Berlin, 1922 などが安価で造作もなく転がっている。Vittorio Pica, *Attraverso gli Albi e le Cartelle*, Istituto ital. d'arte grafiche editore, Bergamo, 1902 は世紀末の雰囲気濃厚に残し、

日本版画についても実に気の利いた選択がある。今世紀初頭におけるグラフィック大全鳥瞰にはもってこいの書物といえる。

この本屋さんには芸術と工芸が専門だと歌い文句にはあるが、そんなに広くもない店内は文学そのほかも充実している。音楽関係は省略するが、文学ではとりわけアイザック・ディネーセン／カレン・ブリンクセン関係は、原語から翻訳、伝記や写真集まで含めて、壁一面を覆うほど。横の歴史の棚には、ムッソリーニの娘婿で、裏切られ非業の最後を遂げた若き外務大臣チアノの『日記』の英訳初版、などというのものもある。それやこれや、ここで買わねばまずもうお目に書かれぬ代物を摘まみ出すと、結局床のうえにひと山が築かれた。発送を依頼すると、現金支払いなら一割引き。その割引分で航空運賃をカバーできるという。当方がニュー・ヨークに来て一週間もせぬうちに、大きな箱に丁寧な詰め込まれて、一式無事到着した。

お隣りの Peter Grosell's Antikvariat ⑤ はすこし高級っぽい店構えで敬遠していたのだが、一軒目で何うと、安くて出物もあるとの助言なので、扉を押して階段を下る。皮革装の古めかしい全集や時代物の脇に、これまた充実した美術欄が壁一面。ボール・ゴーギャンの『ノアノア』ストックホルム版ファクシミリ原色複製一九四七年が三五〇クローネ。これに限らずゴーギャンの手稿には、シャルル・モリスによる改竄と、ゴーギャン自身による再加筆などがあって、いろいろとややこしい。「正統初版本」の複製はパリで一九八八年にも出版されているが、これと本文を比べるためにも、ひとまず出費を惜しむわけには行かない。いずれにせよ、事情を知らない日本の古本屋に転売するなら、十万円は堅いから、損はずまい。

もうひとつ Claude Roger-Marx. *La Gravure originale in France, de Manet à nos jours*, Editions Hyperton, Paris, 1939 がわたくし二〇〇クローネ。現在ではもはや印刷技術そのものが廃

れてしまった大判の複製を多数含み、どちらかといえば今日では収集家むぎの本だろう。だが、当方としては、創作版画評価史の一環として、ファッションやレオン・ローザンタールの世代とアデマールからミッシェル・ムロにいたる研究史とのあいだを繋ぐ著作として無視できない。あとは研究の必要上から、また青い本だが *John Lafarge* 展覧会カタログ *Sumithonian Institution, Washington, 1987* が三五〇クローネなので、ついでに購入（まあ妥当な値段ですな）。ニューヨークでさっそく入用な本のひとつが準備できた。やはりここは老舗で手堅い商売と見えたが、年四回ほど充実したカタログも作っている。それを期待もせずには、パラパラ捲ると、もう店頭からは消滅していたものの、今世紀初期の出版物で、ベルリンやアムステルダム of 古書店でもめつたに出ない本が、あちこちに目に留まる。さすがに値段は抜け目ないが、それでも一―二万円代で、天金皮革装なら文句も言えまい。

先ほど述べた教会を囲む広場の反対側にも何軒か、もつと古色蒼然たる店があった。

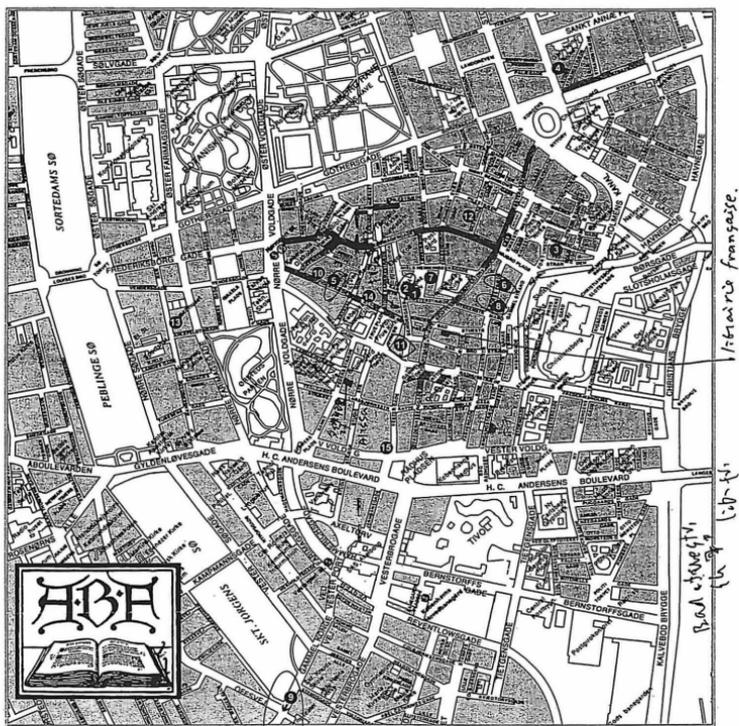
Kabers Antikvariat, Skindergade 34 ⑩は中央の歩行者天国から左手の *コペンハーゲン* 大学本部のある通りよりひとつ手前を右に入ってすぐ。薄暗い半地下は、奥にゆくほど頼りない木造の書架がうねうねと続き、その洞窟が白熱灯に照らされている。かなり雑然とした棚に目を凝らすと、またしても、ある。まず、*Julius Meier-Graefe, Edouard Manet, Piper & Co., Verlag, München, 1912*。初版本。たったの百クローネ。日本にも何冊もあるはずだが、図書管理の電算機化に乗りそこね、相互貸借では入手できずにいた代物。*Léonce Bénédite, Le Musée du Luxembourg, Librairie Renouard, Paris, 1912* は当時のフランス国立現代美術館コレクションの復元には不可欠。これもわずかに百五〇クローネ。さらに *Weisbach's Impressionisten (1908?)* という奇怪な巨大二冊本まで、そこそこの値段で放置されていた。

少々啞然としたのが、Paul Gauguin, *Avant et Après* [1903] のファクシミリ版、ed. Paul Carit Anderson; J. Chr. Sørensen et Cie, Copenhagen [年代記載なし]。三百五十クローネ（ちなみに Peter Grosell's Ankiqvariat ではおなじ版の装丁をやり直して、二倍以上の価格で売っていた）。この本の原稿はゴーギャンが死去する直前にアンドレ・フォンタナスに発送したものの、フォンタナスは出版に漕ぎ着けず、ユベンハーゲンに住んでいたメット・ゴーギャン未亡人の手で、一九一四年にファクシミリ版がミュンヘンで出版された。その後ルネ・ユイグ解題によるファクシミリ版もパリで出版されているが、この市場価格は、日本では十万円を下らない。とはいえ当方の関心は、ゴーギャンが表紙見返しに貼り付けた浮世絵、『化競郭夜櫻』（ばけくらべ くるわ よざくら）とある花魁絵が、左扉にゴーギャン自身の版画と並べられ、右扉側には、それとは別らしく国綱（二代国輝）筆とある歌舞伎舞台が貼ってあるのがミソ。事情通は先刻ご存じのとおり、『前後録』の本文にはゴーギャン自身のものというより、J.A. Moerenhout の民俗学的知見や画家ドラクロワの芸術論などからの、断り書きのない借用が満ちている。文のみならず絵画そのものでも、ゴーギャンは他人から剽窃ばかりしていて、けしからん、とは当時のピサロから今日の美術史家に至るまで繰り返された批判。実際そのとおりだが、しかしゴーギャンの借用に目くじらをたてる批判姿勢そのものが、かえって独創性となるものへの信仰、という馬脚をあらわにしている。ゴーギャンの手前勝手な借用癖は、そうした西欧に伝統的な本物／借り物を弁別する思想そのものへの反逆であった。その高らかな宣言が、『前後録』見返しの工夫に見られるわけだ。

もう一件で時間切れとなった。今の店からほんの斜向かいにある Booktrader, Skindergade 23 ㉓。わりと広い半分地下の倉庫に、分野別に雑多な本が気ままに山と山と積まれている。

禿げ頭の主人がどうやら一人で切り盛りしているらしい。極東という棚を見ていると、Henry Goodman 編の Malcolm Cowley の序文（この）の *The Selected Writings of Lafcadio Hearn*, The Citadel Press, 1949 が所在なげに混じっていた。この本、序文も充実しているが、本文の選択もシンシナティー時代のものから、カリブのスケッチをカヴァーしており、日本編も「ある停車場にて」で始まり、「守られた約束」で終わるといふ周到ぶり。コンパクトながら五六頁の大冊で、使い勝手もよさそうだ。編者は枚数制限から犠牲にした好編の多いことを恨んでいるが、巻末の書誌をみると雨森ノブシゲのハーン回想まできちんとリストに入っている。さては平川祐弘氏の隠れた種本の一冊か。それにしても敗戦後ハーンは見向きもされなくなったとの説にもかかわらず、こんなきちんとしたアンソロジーが、ニュー・ヨークでハイネ、ボードレー、ランボー、ヴェルレーヌの詩集と並んで出版されている、というのはどういふことか。おそらく事情通には苦笑される方も多いただろうが、そんな疑問を解く鍵を、おめおめ逃す手はない。値段は、たった百五〇クローネ。カウンターにもって行くと、主人が良く見つけたな、という顔つきでニヤリとする。ついでにケート・コルヴィッツのドイツ語版『自伝』という文庫本も、たった五〇クローネなので、購入。つい十日ほどまえのプラハの学会では、ハイデルベルグのルドルフ・ワグナーの質問に答えて、辛亥革命後の中国での表現主義の流行と、第一次世界大戦後のドイツ表現主義におけるシナ趣味との競合現象にも言及したばかり。そうした背景を考えれば、魯迅がケート・コルヴィッツを取り上げた理由も明らかになるはずだ。そんな思いつきの備忘録としても最適な買い物だろう。

いささか筆者個人の趣味に引き付けすぎた古書店案内になったかもしれない。だが視野狭窄の当方でもこの程度の成果あり、となれば、北歐大都市という市場が以外な穴場であることも



コペンハーゲン古本屋地図

お分かりいただけよう。なお Den Danske Antikvarboghandlerforening (ドイツ語からの類推で意味はすぐにお分かりだろうが) がロンドンハーゲン中心にデนมार्クの古書店協会所属二店舗の住所、E-mail それに地図をつけた冊子を発行して いる (Postboks 2028, DK-1210, København, K, Denmark)。これらの古書店の店頭でも無料で貰える

が、郵送も可。インターネットなら [http://www/antivar.dk](http://www.antivar.dk) でアクセス可能。何卒ご利用のほどを。